

昨年5月、深く静かに進行する新型コロナウイルス感染症の流行状況が注視されている中、生きることとは、人の生涯とは、さらに終末期医療と安楽死、そして人の命とその尊厳とは何かを問う小説『いのちの停車場』が上梓された。折しも、コメディアンや俳優が新型コロナにより非業の死を遂げたことが報じられ、しかも入院後、家族は面会や最期の時さえ付き添うことができなかった非情な状況が伝えられる。この作品の上梓はその時期と重なり、まさに人の命とその尊厳、そして死について改めて問う形となった。また、この作品の舞台は在宅医療現場であり、現実それに携わる医師と医療関係者のもとより、患者サイドも含め、老若男女や年齢を問わず、多くの人たちから注目された。

そして本年5月、本作をもとにした映画「いのちの停車場」が吉永小百合さん主演で封切りされた。

今回は、この『いのちの停車場』の原作者で、現役の内科医でもある南杏子氏をご紹介します。人の命と尊厳、そして終末期医療の難しさと奥深さ、医師を目指したきっかけなどについて、お話を伺った。聞き手は当協会の早坂美都理事。

【プロフィール】

南 杏子 (みなみ・きょうこ)

1961年、徳島県生まれ。日本女子大学卒。出版社勤務を経て、東海大学医学部に学士編入し、卒業後、慶応大学病院老年内科などで勤務。その後、スイスへ転居し、スイス医療福祉互助会顧問医などを務める。帰国後、都内の高齢者病院に内科医として勤務しつつ2016年『サイレント・プレス』でデビュー。他の著書に『いのちの停車場』『ディア・ペイシエント 絆のカルテ』『希望のステージ』『ブラックウェルに憧れて』『ヴァイタル・サイン』がある。



Interview

小説家 医師

南 杏子さん

患者さんの残された力で 最期まで生きることを支える

終末期医療を通じ 改めて命とその尊厳を問う

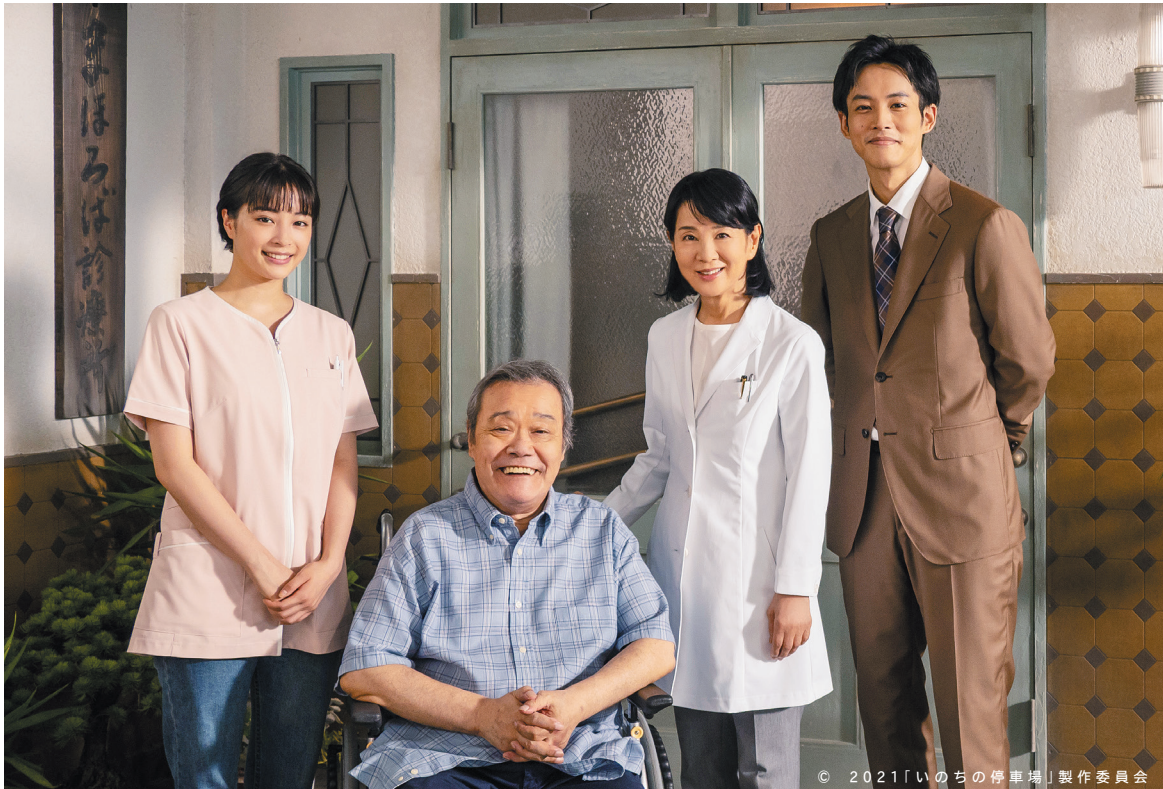
——小説として映画にもなりました『いのちの停車場』ですが、安楽死や尊厳死をテーマとしたこと、大切にしたいと思った点についてお聞かせください。

これまで、終末期医療はあまり注視されていませんでした。「ターミナルだから、医療はもう必要ないのではないか」と思われてきたケースもあるでしょう。またその一方で、急性期の患者さんに対する医療と同じことが行われてかえって苦しめたり、さらには命を縮めてしまうことさえありました。私自身が終末期医療に携わるようになって気付かされたのは、高齢者には高齢者に合った過不足のない医療が必要だということ。終末期医療は、テキストのように「この病気はこうに治療すればよい」とは決められず、個性が高いことに特色があり、また難しさがあります。だからこそ、うまく対処できた時にはやりがいを感じます。

——生きる力、生きること、を支えることは、どのようにイメージすればよいのでしょうか。

登山でもそうだと思いますが、「もうすぐ頂上だ」と言われると、今の辛さを乗り越えて頑張ることができそうです。それと同様、病氣と闘う患者さんやご家族も、「いつかは痛くなくなる時が来るのだ」「苦しくなくなる、楽になれる」と思えば、頑張れます。在宅介護をしているご家族も、最後は「この施設に入ろう」という目標があれば、そこまでは頑張れると思います。いつまでも患者さんやご家族に「耐えること」を強いるわけにはいきません。生き続けるためには「オアシス」が必要で、生きる力、生きること、を支えるとは、その双方にうまく折り合いをつけることではないでしょうか。

——原作小説として映画とともに、ラストシーンでは「痛い」という苦痛から患者を助け出す、楽にすることが課題になっていると思いますが、万一、自分の家



© 2021「いのちの停車場」製作委員会

映画「いのちの停車場」は、第11回北京国際映画祭のコンペティション部門にノミネートされる

私は大学入学を機に、名古屋から東京に来て祖父母の家に下宿しました。来てみて驚いたのは、脳梗塞で倒れ、ほぼ寝たきり状態だった祖父を、祖母が大変な思いをしながら一人で在宅介護をしていたことでした。私も巻き込まれるように祖母の手伝いをせざるを得ませんでした。当時は介護保険制度がまだなく、祖母は疲れ果て、祖父の療養環境も快適とはいえないものでした。在宅では、どうしても介護の担い手が限られ、設備も限られています。家族の愛情だけでは、なかなかうまくいきません。現在の病院や施設は設備やノウハウも整っています。いろいろな職種の人たちの協力によって、患者も家族もより満足した日々を送ることが可能になるもの

族がそのような状況になった場合、どうすれば良いのでしょうか。

ただでさえ、彼は徐々に不満を募らせるようになっていました。

—— 私たちにとっては、そのような状況は非日常ですが、原作小説の中には、6つの異なる物語が紹介されています。中でも、第5章の「一人魚の願い」が気に入りました。

まず、担当の医師や看護師に相談してみてください。終末期医療を担う医療スタッフは、患者さんだけでなく、そのご家族へのケアも大切だということをよく知っています。患者さんの容体が悪化して行くのを目の当たりにしている家族がどのような思いを抱くのか。そこへの配慮もし、さらに、亡くなった後に「いい最期だった」と思う

子どもであっても、大人以上にいろいろなことを考えている場合もあります。以前、小学校6年生の白血病の男の子を担当したことがあります。検査が進

むにつれ、彼は徐々に不満を募らせるようになっていました。理由も知らされないまま何度も採血されるのですから当然です。やがて医療スタッフは、このままでは治療に入るのは困難だと考えました。理由も分からずに抗がん剤の副作用を乗り越えることはできないからです。

そこで両親に、患者さんへの病状説明の必要性をお話したところ、最初は「子どもには説明しないでほしい」と反対されました。しかし、今後の抗がん剤

治療のためにもお子さんに理解してもらうことが必要であると説得し、何とか了解を取り付けました。小学生に理解してもらうようう、説明には細心の注意を払いました。病名や治療方法などを丁寧に話すと、その子は「わかった」と答

え、その後の検査や治療に非常に協力的になったのです。私たちも、「子どもだからわからない」とは限らないことを知りました。このときに感じた思いを、第5章に登場する萌ちゃんに託しました。

——在宅医療についての考え方、感じていること、その課題やメリットとデメリットについてお聞かせください。

私は大学入学を機に、名古屋から東京に来て祖父母の家に下宿しました。来てみて驚いたのは、脳梗塞で倒れ、ほぼ寝たきり状態だった祖父を、祖母が大変な思いをしながら一人で在宅介護をしていたことでした。私も巻き込まれるように祖母の手伝いをせざるを得ませんでした。当時は介護保険制度がまだなく、祖母は疲れ果て、祖父の療養環境も快適とはいえないものでした。在宅では、どうしても介護の担い手が限られ、設備も限られています。家族の愛情だけでは、なかなかうまくいきません。現在の病院や施設は設備やノウハウも整っています。いろいろな職種の人たちの協力によって、患者も家族もより満足した日々を送ることが可能になるもの

だと思っています。

——勤めを辞めて医学部に入学し、医師として医療現場を目指すとう決心したきっかけは。

もともと人間の体の構造や機能に興味があったのですが、医師になろうと考えたことはなく、編集記者として働いておりました。31歳のときに産休・育児休暇を利用して、夫の留学先であるイギリスに行きました。現地でアロマセラピストの資格を取るための学校に行き、解剖生理学の勉強をして、さらに医学を学びたい気持ちが強くなりました。日本に帰国する直前、夫が取り寄せていた日本の新聞から、医学部へ入学できる制度を紹介した記事を見つけてくれました。

——医学部に通い始めてから苦労したことはありませんか。

他の医学生との年齢差はほとんど気にならず、勉強は楽しかったです。往復の通学時間が4時間でしたので、よく電車の中で勉強しました。ただ、早生まれの娘が小学校の担任から成績

た。私も、「これなら勉強できるかもしれない」と考え、帰国後すぐに受験の準備を始め、私が33歳、娘が2歳の時に医学部2学年に入学しました。1学年は一般教養課程のため、学

士入学者は免除されたのです。在学中は夫も夫の両親も、育児や家事などすべてにわたり協力し、医師になることを応援してくれました。

——歯科医師にはどのようなことを期待していますか。

勤務先病院の患者さんの平均年齢は90歳で、その8割が認知症を患っています。そのためか、新製した入れ歯は馴染みにくく違和感があるようで、なかなか使ってくれません。そのため、やわらかい食べ物にするなどで対応しています。また、インプラントのメンテナンスだけが露出している患者さんもあり、その対応を考えているところなんです。患者さんのQOL向上には食べることが不可欠です。これらに関する歯科医師の先生方の活躍に大きな期待感を持っています。

——日頃大事にしている言葉について、ご紹介ください。

「出会いを大切に」です。いろいろな方にお目にかかり、様々なお話を伺い、貴重な知恵を授けていただく。このことは、自分のためだけでなく患者さんとそのご家族のためにもな

りますので、人と人との出会いを大切にしています。

——本日はお忙しいところ、貴重なお時間をいただきありがとうございます(了)



今回、インタビューでご紹介させていただきました南杏子さんの著書『いのちの停車場』(サイン入り)を会員4名様にプレゼントさせていただきます(お1人につき1冊まで)。

ご希望の会員は、官製はがきに「南杏子先生著書希望」と明記し、必ず以下の4点を記入のうえ、協会「書籍プレゼント」係までご応募ください(複数応募不可)。応募締め切りは9月17日(金)です(消印有効)。当選発表は、書籍発送をもって代えさせていただきます。

応募はがき記載事項

①氏名 ②会員番号 ③電話番号 ④住所

応募送付先 〒169-0075東京都新宿区高田馬場1-29-8 いちご高田馬場ビル6階 東京歯科保険医協会「書籍プレゼント」係まで

～『いのちの停車場』あらすじ～

東京の救命救急センターで働いていた、62歳の医師・咲和子(吉永小百合)は、故郷の金沢に戻り「まほろば診療所」で訪問診療医になる。「命を助ける」現場で戦ってきた咲和子にとって、「命を送る」現場は戸惑う事ばかり。老老介護、四肢麻痺のIT社長、6歳の小児癌の少女……現場での様々な涙や喜びを通して咲和子は在宅医療を学んでいく。一方、家庭では、骨折から瞬く間に体調を悪化させ、自宅で死を待つだけとなった父親から「積極的安楽死」を強く望まれる……。

出演：吉永小百合

松坂桃李 広瀬すず／石田ゆり子 田中泯 西田敏行 他

監督：成島出 脚本：平松恵美子

原作：南杏子『いのちの停車場』(幻冬舎文庫)

【絶賛公開中】公式HP：<https://teisha-ba.jp/>



■インタビューについてのご感想は、氏名と連絡先を明記のうえ、info@tokyosk.comへお寄せください。過去のインタビューは、当協会HPからご覧になれます。

